

狸 2 1 狸の最後 = = = 猪・鹿・狸より

村の狸の話もはや末であった。屋敷近くの森や窪にいた狸は、家のものと呼びくらしで負けて、腹を上にして、とくに軒下へ来て死んでいた。その他の古狸の多くも、大方は狩人に鉄砲で撃ち殺されたり、カンシャク玉を噛まされて、口中を打ち割って死んでしまった。煮て喰ったが肉が恐ろしくこわかったぐらいで、簡単に結末が着いていた。かつて多くの物語を遺したものにしては、あっけない最後であった。それからもう一つ、呼び負けたり鉄砲で撃たれたのではなく、やや狸らしい最後を遂げたものがある。鉄道が通じたと同時に、汽車に化けて、反って汽車に轢殺されたのである。何処にもある話で、あまり煩わしいが、一通り言うてみる。

明治三十幾年であった。豊川鉄道が初めて長篠へ通じた時である。川路の正楽寺（勝楽寺）森の狸が、線路工事のために穴を荒らされた仕返しに、ある晩機関車に化けて走って来て、こっちから行く汽車を驚かした。初めの時は機関手もうっかりして、慌てて汽車を止めたが、次の晩には向うも同じように警笛を鳴らしたが構わず走らせると、その機関車はふっと消えて、何やらことりと轢いたと思ったが、ただそれだけでもう何事もなかった。翌る朝見ると線路に古狸が一匹轢かれて死んでいた。それを線路工夫が拾って煮て喰ったげな、あの川路の停車場から少し長篠寄りの、山をえらく掘り割った処だと、もっともらしい話だった。それから正楽寺の森へは、ちっとも狸が出ぬと言う。

妙なことにこの話の生まれる前に、同じ類の話を自分などもすでに聞いて知っていた。話は川路よりは遠かったが、初めて東海道へ汽車が通じた時だと言う。宝飯郡の御油と蒲郡の間のトンネルで、古狸が汽車に化けて轢かれたともしばら言うた。トンネルが出来て穴を毀された恨みと言うのも前の話と違わなかった。汽車が第一に運んで来た土産だったことはよく判る。如何な狸の奴でも、汽車には叶うまいなどと、感心したものであるが、一方から考えると、狸にとっての汽車とは、トンネル工事で穴を毀される以上に、憎い憎い敵であったかも知れぬ。そうして結果は狸が負けて亡びていったのである。

トンネルのことから、もう一つ連想する話があった。明治の初年、長篠の湯谷（ゆや）から、川伝いに牧原（まきはら）へ越す峠を、独力で開鑿（かいさく）してトンネルにしたものがある。その後その山の狸が、穴を荒らされた腹癒せに、每晚出て悪戯をする。日が暮れると、マンボ（トンネル）の中程に傘をさして立っていて嚇すと言うた。穴を荒らされた主でなしに、通行人に仇をしたのは聞こえぬわけあいだったが、こちらは汽車でなかっただけ、狸の方は太平楽でやっていて、結局通行人が永いこと迷惑したのである。しかしその狸は、格別殺された話も聞かなんだが、近年人道の下をさらに汽車のトンネ

ルが通じたから、あるいはまた変な真似をして轢き殺されたか知れぬ。しかしまだ聞いていなかった。あるいはとっくに何処かへ安住の地を求めて去ったのかも知れぬ、もう大した噂も聞かなかった。

半殺しの狸ではないが、まだ言い残したことが一つある。横山から東へ、遠江引佐郡別所の、本竜寺と言う古寺では、夜になると狸が雪隠に来て悪さをするとする。ある時寺にいた娘が用足しに行って、青くなって逃げて来た。寺婆が検分に行くと、白髯のえらい爺が中に踞んでいたと言う。明治初年のことでその婆さんから直接聞いた話が伝わっていた。また狸が雪隠の戸を鳴らす話は外にも聞いたものである。誰もいないのに、キーと音がするのは狸だなどと言うた。この話と関係があるかどうか知らぬが、山小屋などでも、狸が雪隠について困ると言うことをたびたび聞いた。



平成 17 年 3 月 21 日

三都橋で檻に入った狸です。野生のはずなのにえらく神妙にカメラに納まってくれました。近くにいるのに、タヌキの気配が感じられないのは、私たちの感覚が鈍っているのかそれとも流石タヌキと言うべきなのか。

菜食のハクビシンとは何とか棲み分けているようなので先ずは—安心です。